

令和8年度 研究推進計画

学校名 東広島市立河内小学校

校長 大星 篤志

学校名 東広島市立河内中学校

校長 仙立 勝義

1 研究主題、研究内容・方法等について

①研究主題

豊かに伝え合う児童生徒の育成

～小中9年間の系統的な指導と協働的な学び合いで深める授業づくりを通して～

②主題設定の理由

【昨年度までの取組、成果と課題】

本小中学校は、令和5年度から2年間、東広島市教育推進指定校の指定を受け、児童生徒の表現力、特に伝える力を伸ばしたいとの願いから、「自分の考えを進んで表現する児童生徒の育成～『問いを創る授業』の手法を活用した課題発見・解決学習を通して～」と設定し、共同研究を進めてきた。

その成果として、全体的には表現しようとする意欲は高まったものの、『問いを創る授業』の取組が児童生徒の学習意欲の向上につながったか十分検証できなかったことを踏まえ、引き続き『問いを創る授業』の手法は継続して研究を継続することとした。

昨年度は、研究主題を「ゴールに向かって主体的に学び続ける児童生徒の育成～『問いを創る授業』の手法を活用した課題発見・解決学習を通して～」と設定した。主な研究内容として、『問いを創る授業』の実践、単元構想シート「ビジョンシート」の作成・活用、小学校では「リーダー学習」にも取り組んだ。単元を通して付けたい力を、教師と児童生徒が共有し、児童生徒それぞれが目的意識をもち、仲間と関わりながら粘り強く学習していけるよう、教師は伴走者として授業づくりを進めていく意識をもって研究を進めた。

昨年度の成果と課題としては、次の表に示すとおりである。

成果	課題
<p>○「問いを創る授業」の定着 児童生徒に「問いを創る授業」が浸透し、単元や授業の導入から主体的に学習に取り組む姿が多く見られた。</p> <p>○ビジョンシートの活用 児童生徒と指導者でビジョンシートを共有する取組を共通で行ったことで、単元全体を見通して学習する意識が高まった。</p>	<p>●小中での実践交流 小中共同での研修や授業の相互参観など、昨年度ほどできなかった。特にビジョンシートについては、小中それぞれ活用法が生まれたものの、共有する機会を確保することができず、よりよいものを生み出すことが十分にできなかった。</p>

【令和7年度 研究紀要 p147 から抜粋】

成果として、令和5年度から3年間かけて取り組んできた「問いを創る授業」の定着があげられる。教師が提示する「不思議のタネ」の内容も児童生徒の知的好奇心をかき立てるものが増えてきており、また児童生徒も、提示された「不思議のタネ」から自由に問いを創りだし、多面的・多角的に考えながら単元のゴールに迫っていく姿が見られるようになった。

加えて、昨年度その在り方をブラッシュアップして取り組んできたビジョンシートは、教師が単元全体の構成を把握し、適切に指導計画を立て、授業を進めることにつながり、児童生徒としても、単元のゴール

ルを達成するために、今どのようなことに取り組めばよいかを把握しやすくなる等、一定の効果を感じることができた。

一方で課題として、小・中学校での実践の共有があげられる。本来、本小中学校は、併設型小中一貫校として、それぞれのよさを取り入れて高まることができやすい環境にある。校区の小学校・中学校で協力し、9年間かけて適切な指導や支援を行っていくためにも、系統的な指導内容、学習事項の共通理解を図っていく必要がある。このような課題を改善していきながら、今後も、学校教育目標『『夢と志』をもち、未来に向かって果敢に挑戦する児童生徒』を育てていく。

【本小中学校の現状】

本小中学校は児童数 57 名・生徒数 95 名の小規模校である。特に小学校は年々児童数が減少しており、令和 9 年度以降は複式学級が生じる可能性がある。実態については、素直で優しく、指示されたことには真面目に取り組む児童生徒が多い。また小学校では「一人歌い」、中学校では TED 等、個々の活躍の場が多く設定されており、児童生徒は様々な取組に挑戦しやすい環境にあるといえる。一方、自ら課題を見つけて解決しようとする姿勢や、自分の考えをまとめて相手に伝えることに課題がみられる。中学校では、基礎学力が定着している生徒と十分定着していない生徒が二極化していることや、人間関係が固定化し、周りの言動を気にするあまり、自分や他者を受け入れることが難しい生徒もいる。変化の激しい社会をたくましく生きるためには、自分の意見や考えを持ち、相手の意見や考えも受け入れ、それらを伝え合いながら新たなものを生み出す力も必要である。その力を身につけるための基礎・基本が十分に定着していない児童生徒も一定数いるのが現状である。

これらの課題及び現状を踏まえ、学習指導と生徒指導を一体的に進め、安心安全な学習環境づくり、集団づくりを通して、学習集団の質を向上させるとともに児童生徒が主体的に学び、基礎的・基本的な知識を定着させ、豊かに伝え合う力を身につけさせる必要があると考えた。

【主題に迫る手立て】

研究主題にある「豊かに伝え合う」とは、「自分の意見や考えを伝え、また相手の意見や考えにふれて、自分の考えを広げたり深めたりしながら、新たな価値を生み出す」様子を表すものとする。

豊かに伝え合う児童生徒を育成するために、授業では、昨年度に引き続き「問いを創る授業」の手法を活用した課題発見・解決学習に取り組ませる。「問いを創る授業」とは、「問い」を思い浮かべる手がかりとなる「不思議のタネ」を提示し、児童生徒自身の中からわき上がってきた疑問を「問い」の形にして、それを解決していく授業である。この授業モデルを小中一貫して、また教科横断的に実施することで、児童生徒の主体性を高め、学力を向上させる素地を育成していく。

また、児童生徒が単元での学習に見通しを持てるように「ビジョンシート」の活用を継続する。「ビジョンシート」には、単元全体のゴールや、「不思議のタネ」、また学び方や学習内容等を段階的に示すもので、児童生徒自身が「単元全体の中のどの部分を今学習していて、それが単元全体のゴールにどう結びついていくのか」を理解しやすくなる。加えて、ビジョンシートは児童生徒と教師が共有しながら活用していくので、教師も単元の目標や指導事項が明確になり、児童生徒の主体的な学習を引き出しやすくなる。

「問いを創る授業」の授業モデルは、新しい学習内容の「不思議のタネ」を、既習事項とのかかわりで児童生徒が見ることができるかどうかで、その後の学習の深まりも変わってくる。つまり、児童生徒が各学習段階において基礎・基本の徹底ができているかどうか重要になってくる。そこで、小中 9 年間で発達段階ごとに区分し、その中で「これだけは定着しておくべき」事項を明文化し、ルーブリックの形で体系的にまとめることで見通しを持った指導を充実させる。なお、昨年度の研究で中学校教員に実施したビジョンシートについてのアンケートでも、ビジョンシートを作成する過程で、小学校段階を含む既習事項との関連を考えることができたと回答した教員は 100%であった。このことから、ビジョンシートは小中 9 年間の系統的な指導の充実のために作成・開発する「基礎・基本のルーブリック」とも相乗効果が見込まれる。

児童生徒が豊かに伝え合うためには、授業で協働的な学び合いの場が十分に確保されなければならない。そこで、発達段階に応じて、話し合い活動のルールや反応の仕方、また内容を深めるための質問の仕方等

を児童生徒に提示し意識づけを行い、意図をもって授業内で話し合えるように取組を進める。「問いを創る授業」は課題発見や課題解決を通して児童生徒が主体的に学習活動に取り組むことが多く、話し合い活動が頻繁に行われる。それをより意義深いものにするためにも、話し合い活動の「いろは」を児童生徒と共有していくことは重要であると考える。

学習したことをメタ認知し、基礎・基本の定着につなげ、児童生徒が豊かに伝え合う土台を固めていくために、授業内の振り返りを体系化していくことも手立ての一つとする。振り返りの視点を小中学校で統一し、評価の観点をキーワード化して自己評価させることで、学習事項のさらなる定着を図っていく。

また、集団づくりも同時に進めていく必要がある。今年度は各学年、各学級単位での SST（ソーシャルスキルトレーニング）や小中合同での児童会・生徒会活動、学校行事を充実させ、自己有用感、自己肯定感を授業内外で高めていきながら、学習集団の質の向上を図っていく。

これらを通して、学校教育目標である『夢と志』をもち、未来に向かって果敢に挑戦する児童生徒の育成」をめざす。

③研究仮説

小中9年間の各段階において確実に定着させる事項を共有し、各単元で学習の見通しを持たせながら「問いを創る授業」を行い、その中で協働的に学び合う時間を設定すれば、学習集団の質が相互作用的に高まり、児童生徒は学習活動において、豊かに伝え合うことができるであろう。

④研究内容

○授業改善の推進

- ・「問いを創る授業」の実践
- ・小中9年間の系統的な「基礎・基本」定着ループリックの開発
- ・小中同一形式での授業の振り返り
- ・指導者・児童生徒が単元を見通せる「ビジョンシート」の作成・活用
- ・協働的な学び合いを促す集団づくり活動の全校的な推進
- ・授業研究における小中学校教員の相互参観、研究協議

⑤検証の方法及び指標

- ・児童生徒・指導者アンケート 肯定的評価 85%以上
- ・研究授業でのループリック評価 B評価 80%以上
- ・各種テスト（小：単元末テスト（算数科）、中：各教科の定期試験及び実技テスト）
12月までの「思考・判断・表現」に係る問題の得点率において、年度当初の得点率以上の生徒の割合が7割以上

2 検証計画

- ・児童生徒アンケート（児童生徒・指導者）…計4回（5月・7月・10月・12月）
- ・授業研究、協議会の実施（小中全教職員）…6～12月
- ・各種テスト…随時

3 校内研修計画

実施予定月	研究(研修)内容	担当者	備考
年2回 通年・随時	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価①②結果の伝達 ・児童理解研修(特別支援・生徒指導) ・ICT研修 ・小中研究主任連携 	校長・教頭・教務主任 特別支援教育Co・生徒指導主事 情報教育担当 研究主任	
年4回	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒・教職員アンケート (実施→集計・分析) 	教頭・教務主任・研究主任	
年2回	<ul style="list-style-type: none"> ・各種テストの結果分析 	各担任	
年5回	<ul style="list-style-type: none"> ・小中合同研修 	小中研究主任	
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程について ・授業での学習規律等共通理解 ・研究主題・内容・計画について ・学習指導案の作成について 	教務主任 教務主任・研究主任・生徒指導主事 研究主任 研究主任	
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・授業づくり、学級づくり研修 	研究主任	
5～7月	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究 	授業者	授業研究の内容
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・授業づくり研修 	講師	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案検討 ・模擬授業
9～12月	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究 	授業者	<ul style="list-style-type: none"> ・授業
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・授業のまとめ作成(研究紀要) 	研究主任・授業者	<ul style="list-style-type: none"> ・協議
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の成果と課題の分析(研究紀要まとめ) 	研究主任・全教職員	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめ文書作成
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度に向けての計画立案 	校長・教頭・教務主任・研究主任	

4 研究公開の予定について

特になし

令和8年度 東広島市立河内小・中学校 研究構想図

【児童生徒の実態】

- ・個々の活躍の場を多く設定したりして、様々な取組に挑戦しやすい環境にある。
- ・小学校では年々児童数が減少している。中学校では行事、特別活動等において目標設定をすることが難しく、各活動の達成感を感じにくい現状にある。
- ・自分の意見を持ち、それを伝え合い、高め合うための基礎・基本の定着に課題がある。

学校教育目標

「夢と志」をもち、未来に向かって
果敢に挑戦する児童生徒の育成

研究主題

豊かに伝え合う児童生徒の育成

～小中9年間の系統的な指導と協働的な学び合いで深める授業づくりを通して～

【研究仮説】

小中9年間の各段階において確実に定着させる事項を共有し、その達成を図りながら、「問いを創る授業」の中で協働的に学び合う時間を設定すれば、学習集団の質が相互作用的に高まり、児童生徒は学習活動において、豊かに伝え合うことができるであろう。

【研究内容】

- ①ビジョンシートを活用した「問いを創る授業」の実践
- ②小中9年間の系統的な「基礎・基本」定着ルーブリックの開発
- ③協働的な学び合いの全校的な推進
- ④小中同一形式での授業の振り返り

【河内中学校区で目指す15歳の生徒像】

- ・自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる生徒
- ・自他を尊重し、自ら考えて、よりよく行動できる生徒